

Book Review

秋草俊一郎

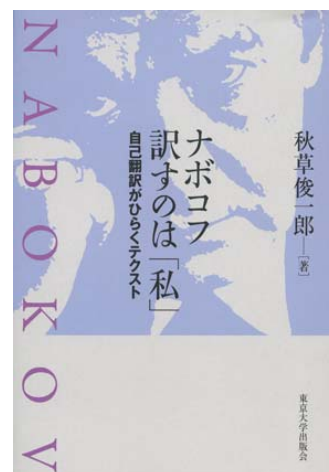
『ナボコフ 訳すのは「私」

自己翻訳がひらくテキスト』

東京大学出版会 2011, 300 pp.

ISBN: 978-4-13-080638-3

評者 北代美和子



ウラジミール・ナボコフは、錯綜するプロットと万華鏡のようなメタファーの羅列、随所に散りばめられた高度な言葉遊び、ひとつひとつのピースが複雑な形をしたジグソーパズルのごとき精緻な構成ゆえに、20世紀でもっとも難解な作家のひとりに数え入れられる。ナボコフはまた、ロシア語と英語を自在に操り、「自分の作品を自分で翻訳」した「自己翻訳」の作家でもあった。ひとつの作品についてロシア語と英語、二つのバージョンがあることが、この作家の読解をなおいっそう複雑な作業にするのだが、本書はそれを逆手にとり、原文と「自己翻訳」とを詳細に比較検討して、そこに見られる異同から作者ナボコフが仕かけた「トリック」を見破り、作品にさらに深く新しい読みを加えようとする。

翻訳を文学批評、文体分析のツールとして使用した例には Tim Parks の *Translating Style* (St. Jerome Publishing, 2007) がある。パークスは、原文と訳文を並列、比較し、翻訳によって失われたものを明らかにすることによって、作者が文体に込めた意図を浮かびあがらせた。同書にはサミュエル・ベケットの「自己翻訳」について言及があり、‘if we examine the change Beckett himself made when he translated, we will get a better sense of what he considered important in his original text, what he is being faithful to, what he feared might be lost’ (p.150) と示唆されている。本書の著者はこのやり方をさらに推し進め、「ナボコフの残した自己翻訳」を「最良の著者自注」であると見なし (p.277)、「自己翻訳」という穴からナボコフの文学世界にはいりこんで、その全体をいわば内側から描き出そうとしている。したがって、これは「翻訳学」というよりはむしろ「文学」に属する論考である。しかし、本筋からは逸脱してしまうものの、本書で明らかにされるナボコフ自身の翻訳手法からは、「翻訳論」の観点から見ても興味深い問題がいろいろと浮かびあがってくる。

たとえば「小説の翻訳における忠実性」について。ナボコフ本人は、プーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』の翻訳を論じた有名な文章 (Vladimir Nabokov, *Problems of Translation: Onegin in English*. 1955) で、文学作品の翻訳者の義務は ‘to reproduce with absolute exactitude the whole text, and nothing but the text’ であると言っている。しかし自分のロシア語作品を英語に移し替えるさいには、大きな改変を加えることも厭わなかった (改変があるから

こそ本書が成立しえるのだが)。本文からその例をいくつか挙げてみよう。

[例1] 登場人物の名前に含まれる情報が、文化的伝統の違いからアメリカ人読者に伝わらない場合、理解をたやすくするために、名前を書き換える。

ロシア人なら名前＋父姓の「エヴゲーニヤ・イサコヴナ」を聞いただけで、その人物がユダヤ人だとわかる。しかし、アメリカ人は父姓「イサコヴナ」からユダヤ人に典型的な名前「イサク」を連想はできない。そこでユダヤ系の姓「ミンツ」を加える(第二章)。

[例2] ロシア語の言語的特性を使ったトリックを英語ではそのまま使えないとき、ヒントとなるような文を書き加える。

短編『重ねた唇』では、代名詞が「人」と「物」のどちらも指せるというロシア語の性格がトリックを解く鍵になる。しかし、**he** や **she** の先行詞 が基本的には「人」である英語では、代名詞に二重の意味を持たせることができないために、別のヒントが必要になる。(第三章)。

[例3] 動植物の名称については、それが正確になになのかよりも、その言葉の持つコノテーションや音があたえるイメージを優先する。

ロシア語で「チョムリーハ」と呼ばれる樹木は、英語の **bird cherry** にあたるが、ナボコフはこれを「あまりに漠然としていて無意味も同然」と考え、新たに **racemosa** という言葉を造った(第六章)。

以上の数例に見られるように、ナボコフにおける翻訳の「忠実性」とは、ミラン・クンデラのそれとは異なるように思われる。クンデラは句読点のひとつひとつに至る細部まで再現して翻訳することを要求した。同じ「自己翻訳」の作家でも、なにをもって「忠実」とするか——翻訳学の用語で言えば「等価」とするか——は、個々の作家次第ということになる。

このこととも関連してくるが、「自己翻訳」の作家として本書に名前が挙げられているベケットも、あるいはミラン・クンデラも、そしてナボコフも、初めからすべて自分で翻訳しているわけではない。共訳者が第一稿を作成し、それに作家自身が細かく手を入れていくという手法をとっている。ナボコフの場合は共訳者と相談することもなく、最終稿は自分一人の手で仕上げたそう。もしも作家が「バイリンガル」であり、ナボコフ本人が言うように文学作品の翻訳者の義務が「テキストの再現にある」とすれば、テキストをもっともよく知るはずの作者自身がなぜ最初から自分で翻訳をしてしまわないのか？ 自作の翻訳をするとき、一度、他者の眼を通して自作を読むという手順を踏まなければならないのはなぜなのか？ おそらく創作者にとって、言葉は思考の単なる伝達手段、その表現にすぎないのではなく、思考それ自体の一部であり、言葉と思考は表裏一体のものとして切り離すことができないのだろう。ひとつの言語で書けることも別の言語では書けない。とすればひとつの言語から別の言語への移し替えには、必然的に喪失がともなうことになり、これを突き詰めていけば、その先に横たわっているのは「翻訳の不可能性」である。

「翻訳論」という視点から本書を読むとき、もうひとつ感じざるをえない疑問は、ロシア語と英語のように比較的近い文化に属する言語間の翻訳とロシア語と日本語のように離れた文化に属する言語間の翻訳とは、果たして同じものなのかということだ。日本語では、「イサコヴナ」にひと言「ミンツ」と付け加えれば、ユダヤ人になるというわけにはいかない。あるいは「ガチョウから水」(p.44)という熟語。ナボコフはこれを like water off goose と直訳している。日本語で言えば「蛙の面に水」の意味だそうだが、同じことを英語でも like water off a duck's back という。「ガチョウから水」と和訳したのでは「ひどい直訳だ」と非難されるのがおちだが、like water off goose なら「鳥の羽を滑り落ちる水」というイメージを共有する like water off a duck's back からの類推によって、アメリカ人読者はそこに「いやなことがあっても、けろっとしている」という意味を読みとるかもしれない。あるいは、like water off goose を正しい英語からの逸脱と非難したり、滑稽に感じて笑ったり、新しくて斬新な表現という印象を受けたりする可能性もある。

このように、ヨーロッパ語どうしの翻訳を論じるときには、同じ世界観を共有する人びとが感じとる微妙な差異が問題となることが多い。しかし、ナボコフがオネーギンの英訳について論じていることの多くがロシア語から日本語への翻訳では俎上にもものぼらないように、遠く離れた文化圏から見ればその差異はあまりにも小さくて認識不能であり、ときには読み手の個人的な解釈の領域に属すると思えないこともある。ロシア語と英語のあいだにある微妙な差異を読みとったという意味で、本書は著者個人による「私はナボコフをこう読んだ」というひとつの読みの提示である。だが、「私はこう読んだ」という以外に、人はナボコフについて、あるいは文学について語るができるだろうか？

.....

【著者紹介】

北代美和子 (KITADAI Miwako) 翻訳家。日本文藝家協会会員。上智大学大学院外国語学研究所修士課程修了。訳書に『名誉の戦場』『アンダルシアの肩かけ』など。